「失言リベンジ」

―初稿―

2025/3/1

脚本 太郎

〈人物表〉

荒屋　仁志　（１４）　中学二年生
荒屋　仁美　（１５）　中学三年生。仁志の姉
伊吹　紗香　（１４）　中学二年生

〈ログライン〉

失言のせいで友人である紗香から避けられるようになった口下手な仁志は、姉の仁美から発破をかけられたことで紗香に自分の真意をきちんと話し、彼女を励ますことに成功する。

〈ねらい〉

・大筋がシリアスなコメディを書く。
・効果的な回想シーンを書く。

1.

児童養護施設・入口前（夜）

表札に「××育児院」と書いてある。
少女の苦し気な息遣いが聞こえる。

2.

児童養護施設・庭（夜）

伊吹 紗香（14）、50メートルほどの間隔を、往復して走っている。
荒屋 仁志（14）、木の陰からその様子を伺っている。水の入ったコップを片手に持っている。
紗香、やがて疲れてへたり込む。
仁志が紗香に近付く。

仁志　「紗香」
紗香　「仁志……」
仁志、紗香に水の入ったコップを渡す。
紗香がコップを受け取り、水を一息に飲み干す。
紗香　「ありがとう」
紗香、仁志にコップを返すと立ち上がる。
仁志　「え、ちょっと。まだやるの？　もう遅いし、さすがに寝ないとだめだよ」
紗香　「呑気に寝てられない」
仁志　「いや睡眠はしないと。できるものもできなく――」
紗香　「（一息に）そんなこと言ってられないの」
仁志、気圧されたように黙る。
紗香　「ごめんね、心配かけて。でも、わたしもうダメかもしれない……」
仁志　「そんなこと……」
紗香　「こんな不可能感初めて。全然追い付かない。ブランクが空きすぎたんだろうね……入院前のペースに戻せる気がしないの」
紗香、次第に泣きそうな顔になっていく。
紗香　「ダメになりたくないから」
仁志、悩みながら言葉を探すように目線を動かす。
悩んだのち、言葉を絞り出す。
仁志　「その……紗香はもっと、肩の力を抜いても良いんじゃな

いかな」

紗香　「え？」

紗香、驚いた表情。

仁志　「別にさ、そんな……無理して早く走ろうとしなくても良いんじゃないかな、って。だって――」

紗香　「はぁ？」

紗香の顔が怒気に歪む。

両手で仁志の肩を掴む。

紗香　「何よそれ……何言い出すかと思えば、何よそれ！」

仁志、完全に腰が引けている。

無言で仁志を睨みつける紗香。

やがて仁志の肩から手をどけ、一歩下がる。

紗香　「仁志ってさ……なんか、これだ、っていうことに必死に打ち込んだこと、ある？」

紗香、仁志の目をじっと見つめて、少し間を置く。

紗香　「これがなくなったら自分が終わってしまうんじゃないかって言うくらいの、切実な、何か」

仁志、しばらく困り顔で思案する。

仁志　「（言いにくそうに）……ないよ」

紗香　「でしょ？」

紗香、嘲るような表情。

紗香　「じゃあ仁志には分かんないよ」

3.

児童養護施設・仁志の個室（夕）

仁志、制服のままベッドに横になっている。

数秒スマホを見て、手を降ろす。悩まし気な溜息。

数秒後、凄い勢いの足音が聞こえてくる。

荒屋 仁美（15）がドアを勢い良く開けて入室。

仁美　「サボり魔失言バカ仁志は居るか」

仁志、驚いて身を起こす。

仁志　「うわびっくりした」

仁美　「あんたうちの可愛い後輩に何言った」

仁志　「え、いや……てかそっちこそ部活は？」

仁美　「話逸らすな紗香に何言ったか訊いてんの」

仁志「姉貴には関係ないだろ」
仁美「大有りだわこの薄情者。どうしてくれんのよ紗香ただでさえ沈んでんのよ」
仁志「本人からならまだしも姉貴にそんなこと言われても」
仁美「何よその他人事めいた言い草。あんた情ってモンはないの？」
仁志「じゃあどうしろと」
仁美「死んで詫びろ」
仁志「情は？」
仁美「とにかく紗香に会って謝んなさい。それからガツンと応援してあげて」
仁志「応援？」
仁美「激励よ激励。叱咤なしの激励。大会近いんだから」
仁志「激励って……何事も押せば良いってもんじゃないと思うんだけどな」
仁美「男のくせに弱気なことばっか言ってんじゃないわよ。とにかく紗香と会って話しなさい」
仁志「今物凄く避けられてるんだよ」
仁美「ほう、そりゃしゃばいわね」
仁志「しゃばい？」
仁美「だったら電話しなさいよ。まだ部活までちょっとだけ時間あるし」
仁志「出ないと思う……というか実際何度かしてるけど出ない」
仁美「なるほどそれは困ったと」
仁美、真剣な顔で何度か頷く。
そして凄い速さでスマホを取り出して仁志に握らせ、彼の耳に押し当てる。
仁美「ところがどっこいそんな時はわたしのスマホを使うが良いほらもしもーし」
仁志「うわ速、怖」
着信音が鳴る中仁志、仁美にスマホを押し返そうとするも凄い力で押さえつけられる。ビクともしない。
仁志「何この人不条理なくらい力強いんだけど何食ってんの」
仁美「主にたんぱく質」

紗香の声「もしもし」
仁志　「……も、もしもし。えっと」
紗香の声「は？　仁志？　これ仁美先輩のスマホじゃ」
仁志　「えっと、その……体調はどう？」
紗香の声「は？　何なの」
仁志　「今日寝不足だろうからさ……その、大丈夫かなって」
紗香の声「……うるさい」
　通話が切られる。不通音。しばらく沈黙。
仁美　「ヘイ愛の鞭一丁、愛抜きで」
　仁美が仁志の頭を手刀で叩く。
仁志　「純然たる暴力だ」
　仁志、頭をさすりながら仁美を睨む。
仁美　「何すんのよ」
仁志　「こっちの台詞過ぎる。……てか愛ないのかよ」
仁美　「最近流行りのラブのないラブコメみたいでスタイリッシュで良いでしょうが」
仁志　「コメじゃん。どこで流行ってるか知らないし意味分かんないよ」
　仁志、スマホを差し出す。仁美がすぐ押し返す。
　仁志、困ったようにスマホを見つめる。
　仁美、大きく溜息を吐く。
仁美　「何でそうなのかしらね」
　仁志、スマホを置き、気まずそうに切り出す。
仁志　「まあ、その……まずいこと言ったってのは理解してるよ」
　仁美、呆れたように笑う。
仁美　「そ。でもまあ本当言うとこっちもさ、あんたが自分から人を傷つけるような子じゃないのは分かってんのよ」
　仁志、驚いたように仁美を見る。
仁美　「何驚いてんの。何年あんたのお姉ちゃんやってると思ってんのよ。大方上手く伝えられなかっただけなんでしょ」
　仁志、涙目になる。
仁志　「（鼻をすすって）姉ちゃん……」
仁美　「泣くんじゃないよいい歳して」
　仁美、ハンカチを差し出す。

仁志、ハンカチを受け取って静かに泣く。

× × ×

仁志、泣き止んでいる。

仁美「もういい？」

仁志「うん」

仁志、ハンカチを仁美に返す。

仁美「じゃあ」

仁美、自分のスマホを差し出す。

仁志、受け取らずに首を振る。

仁志「バカみたいに口下手だからさ、今これ以上話しても余計こじれる気がする。それに激励の仕方なんて知らないし」

仁美、呆れた顰め面。

仁志「ちょっと少し時間を置きたいというか……」

仁美「そうやって逃げ癖があるのははっきり悪いところだね」

少しの間沈黙。

仁美「じゃあ、もういいよ」

仁志「え」

仁志、拍子抜けしたような顔。

仁美が釘をさすように付け加える。

仁美「電話はしなね。あんたの言葉で。でも応援とかはしなくていい」

仁美、自分のスマホを持ってベッドから立ち上がる。

仁美「よく考えたら、それはお姉ちゃんが日頃からやりすぎなくらいやってるから。その代わりあんたはあんたの言いたかったこと、思ってた通りに言い切りな。無責任にならないよう、最後までちゃんとね」

仁志「何で……」

仁美「逃げ癖があるのはダメなところだけど、あんたの控えめな部分に関しちゃ、見た目ほど悪いものじゃない気がするから」

仁美、静かに部屋を出ていく。

仁美「ちゃんと伝えきれなかったんなら、根本から間違ってたかどうかもまだ分からないしね」

仁志、しばらく思案深げにベッドに座っている。

やがてポケットから自分のスマホを取り出し、操作。
スマホを耳に当て、何度か軽く深呼吸。
着信音が長い間鳴る。
紗香の声「（苛ついた様子で）もしもし？　いい加減に――」
仁志　「君が強い人なのは知ってる。よく分かってる」
紗香の声「え」
仁志　「でもそれは早く走れるからとかじゃない」

4.

（回想）児童養護施設・庭（夜）

紗香が必死の形相で、苦しそうに走っている。
仁志の声「君にとってはそれはとても大切なものなのかもしれないけど、でも足の速さなんて君の持つ要素のほんの一粒でしかない」
仁志が木の陰から紗香を見ている。
紗香が疲れてへたり込む。仁志が紗香に近付く。
仁志の声「それがなくなったからといって、君自身の価値が損なわれることなんて一切ない。何も終わってしまったりしない」
仁志が紗香に水の入ったコップを差し出す。
仁志の声「だから、君は……別に速く走れなくったって大丈夫」
紗香がコップを受け取り、水を一息に飲み干す。
仁志の声「でも君が速く走りたいと望むのなら、それができるに越したことはないとは思う。それを否定するつもりは毛頭ない」

5.

中学校・女子更衣室（夕）

ロッカーの前で、体操着姿の紗香が呆けたように耳に当てたスマホに聞き入っている。
仁志の声「だから、その……気楽に頑張って」

6.

中学校・校庭（夕）

紗香が白線の引かれた砂の上を全力で走っている。
その表情は真剣だが、僅かに微笑んでいる。

終